



## 着任挨拶

4月1日より国立病院機構千葉東病院の看護部長に着任いたしました池谷みちこと申します。よろしくお願いいたします。

私自身は、前施設は長野県松本市にあります、まつもと医療センターにて副看護部長として勤務をしておりました。千葉県へ異動する1週間前には雪が舞い、桜はいつ咲くのだろうかと思っておりました。こちらに参りましてから、季節が一変したかのように桜が満開となっており、驚きました。

趣味はドライブが大好きで、早速、成田山新勝寺へお参りに行ってきました。

新しい環境でこれから看護部長として何が出るかという責任の重さをひしひしと感じております。まずは、千葉という土地に慣れ、病院の組織風土にも早く慣れ、当院の理念であります、「地域に信頼される病院づくり」に貢献できるよう努めて参りますので、ご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願いいたします。

国立病院機構は、全国140病院を有する全国最大の医療ネットワークですが、看護においてはActyナース「看護職員能力開発プログラムVer2」を活用し、看護実践能力の向上とキャリア形成を支援しております。当院看護部もそのプログラムにより、特殊性を活かした教育体制を整えております。

「患者様の人権を尊重し、患者様・看護職員相互の情報の共有を十分に図り、心の通い合う看護を目



看護部長 池谷 みちこ

指します」を理念とし、患者さんを生活者として捉え、多職種と協働・連携・調整を図り、その方らしく生きるための支援を行い、患者さん中心の看護実践ができる看護師の育成が必要だと思えます。そのためには、お互いがお互いを注意し合える関係づくりや、お互いを認め合える風通しの良い職場づくりが大切であると考えます。「この看護師は知っているが、他の看護師は知らない」「この看護師は一生懸命考えてくれるが、他の看護師は考えてくれない」というようなことがないよう、コミュニケーションが円滑に図れる看護師を育てることで、「心の通い合う看護」が行えるのではないかと考えています。

今年度、当院に新人看護師15名が就職いたしました。新人看護師も含め患者さんがいつでも相談できる千葉東病院の看護師となれるよう、また、地域の方々から信頼していただけるよう、微力ではありますが努力してまいります。

# 血液浄化センターの取り組み

看護師長：笠原智樹 看護師：古宮育夫

当院血液浄化センター看護部では、血液浄化業務の他にも多くの看護業務を行っており、今回は、それらの取り組みについて、まとめてご紹介いたします。

ご紹介するのは、治療中に実施している業務で、①フットケア・フットチェック ②超音波装置を使ったバスキュラーアクセスの管理 ③透析治療中に出来るリハビリテーション(以下、腎臓リハビリテーションと言います)の実施です。

①のフットケアは、主に糖尿病による下肢病変重症化予防を目的とし、現在の対象患者数は35名で毎月1回治療中に実施しており、患者さんより好評を頂いています。また足病変の早期発見を目的とするフットチェックは全患者さん対象で、これも毎月1回治療中に観察をおこなっています。



②透析患者さんにとって血液を取り出すための血管(バスキュラーアクセス)の管理は非常に重要で、血管に狭窄や閉塞などがあると、治療に支障をきたす恐れがあります。我々看護部では、1)透析導入前にシャント血管の観察をし穿刺部位を決める場合。

2)治療中の脱血不良や再循環があった場合。

3)穿刺困難がある場合などにつき超音波装置を使用して対処しています。特に穿刺困難時には、超音波装置で血管を確認しながら針を刺す「エコー下ガイド穿刺」を実施しています。

これら超音波装置の扱いには専門的な知識や技術が必要な為、半数以上の看護師が専門の研修を受けており、後輩の指導も実施しています。

最後に③腎臓リハビリテーションについてですが、透析患者さんは水分・塩分・カリウム・リンなどの制限があり、加齢と共に食事量・筋肉量も減り、いわゆる「サルコペニア」と呼ばれる状態になり易いと言われています。

そのようなことから、近年透析治療中にできるリハビリテーションが注目されてきました。当院では2023年1月より開始しています。治療中のリハビリテーションプログラムについては、腎臓リハビリ



テーション研修を受けた医師・看護師と理学療法士で構成したワーキンググループで話し合いながら、独自のリハビリテーションプログラムを検討しDVDにまとめました。

このDVDを患者さんが見ながら、治療中にリハビリテーションを実施しています。現在までに7名の患者さんがこのプログラムを実施しており、下肢筋力の維持増進を実感されています。

このように、血液浄化センター看護部では、腎代替療法としての血液透析・腹膜透析にかかる業務のみならず、透析治療に伴う合併症予防に注力し患者さんにとって更なるQOLの向上を念頭に日々活動しており、今後も一丸となって努力を続ける所存です。



# 院内レクリエーション「ちばとんクラブ」

ちばとん

千葉県野田病院キャラクター

認知症看護認定看護師 佐野 明子

高齢患者さんの離床の促進、生活リズムの改善、患者さん同士の交流等を目的に令和5年7月から、ちばとんクラブを開始しました。認知症認定看護師・心理士・病棟看護師が協働して開催しています。

まず「今日は何の日？」というコーナーから始まります。例えば、「12月27日は仲見世記念日です。明治18年のこの日、東京・浅草の仲見世が新装開業しました。」といった豆知識を紹介し、患者さんの緊張をほぐしていきます。このコーナーは、日付感覚を整えることも狙っています。その後、簡単な指先運動、すごろくやトランプといったゲームを行います。最初は「私はわからないからどうしたらいいの？」と戸惑っていた方もゲームが進むうちに、「次は私が引く番ね」と積極的に発言される姿が見られます。皆さん、ゲームが進むにつれ、活気ある表情に変わっていきます。会の後半には、心落ち着く匂いのオレンジとラバンダーのアロマを部屋に置き、リラクセスして病棟に戻っていただきます。ちばとんクラブで初めて会った患者さん同士でも、終わる頃には笑顔で会話をしている姿が見られます。入院生活は単調で患者さんご自身で行うことが少なく、家族との会話もできなくなるなどの活動の低下が起こりやすくなります。特に高齢者の方には、刺激が少ないことで認知機能が低下する恐れが言われています。今後も患者さんに入院生活の中で楽しみを提供するとともに、精神的にも身体的にも機能低下を防ぐような様々な企画を行っていきたいと思います。



## 令和6年1月1日に発生した

## 能登半島地震の災害支援として

事務部 管理課長 本吉 勇二

令和6年1月1日に発生した能登半島地震の災害支援として1/19(金)~1/23(火)の間、当院の坏臨床研究部長、笠原看護師長、笹岡看護師長、新倉薬剤師、齋藤庶務班長の5名で活動して参りました。被災地の日も早い復興を心よりお祈り申し上げます。



# 重症心身障害病棟

## 「オンライン配信による他施設との合同療育」

療育指導室 保育士 花島 弘美

今年度、初の試みとして同じ独立行政法人国立機構病院の宇都宮病院重症心身障害病棟・下志津病院通園ルームと、ZOOMを使用したオンライン配信による合同療育を実施しました。

きっかけは、コロナ禍で外出やご家族との面会などが制限されている中で、重症心身障害病棟の利用者さん達に他者との交流の機会を提供できないかと考えたことです。そこで、他施設へ協力依頼を行い、賛同を得た2施設とのオンライン療育を計画しました。

実施期間・回数としては、令和5年11月～令和6年3月までの期間に5回実施しました。参加メンバーは、相手を意識し親交を深めることを目的としていたため、施設での療育活動で他者との交流を楽しむことを好む利用者さん3～4名程度の固定メンバーとしました。

初回は、まずそれぞれの施設で活動の最初に行っている「始まりの歌」を披露し合うことから始め、施設ごとのオリジナルティーあふれる曲に活動への期待が膨らみました。次に、利用者さんの名前と好きな物や興味のある事柄を明記した「自己紹介カード」を用いての自己紹介タイムです。ウェブカメラに向かいご自身の声を発して伝えたり、職員の代読で伝えたりと、お一人おひとりが注目を浴び、スクリーンを通しての声掛けに戸惑いながらも嬉しそうな表情がうかがえていました。2回目以降は「すごろく」「楽器の音あてゲーム」「ジェスチャーゲーム」に加え、各施設の紹介や自慢を盛り込んだ内容で行いました。利用者さんと職員が共に夢中になり、活動の最後には、音楽に合わせて一緒に楽器を鳴らしたり歌ったりと、笑顔が絶えない楽しい時間を共有することができました。

今回のオンライン配信での合同療育を通して、利用者さんと職員と一緒に楽しんでいる雰囲気を感じることができ、参加した他施設からも病棟職員やご家族から「楽しそうでいいですね!」との声が聞かれていたそうです。コロナ禍だったからこそ生まれた交流の機会ではありますが、今後も利用者さんが楽しめる活動を提供し、生活の質の向上に繋げていきたいと思っております。



ジェスチャーゲーム



楽器の音あてゲーム



自己紹介カード